國學院大學学術情報リポジトリ

〔論文評〕「博物館」の用語に関する論文の評価と研究姿勢について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 哲也, Yamamoto, Tetsuya メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000541

〔論文評〕

「博物館」の用語に関する論文の評価と研究姿勢について

山本哲也

はじめに

『國學院雑誌』第120巻第８号にて、張哲氏による論文「博物館学における用語「博物館」の濫觴に関する一考察」が学生懸賞論文の入選作として掲載された。当該論文では、筆者の論文も参考とされている。内容としては、「博物館」という用語が日本で生まれたのか中国で生まれたのか、また、どういった人物がその生成に関わったのかを探る意欲作である。

しかし、当該論文を読み進めると、さまざまに“引っ掛かる点”が生じてしまい、またその疑念は晴れなかったため、筆者に関わる点について文章化した上で同学内の関係者に通知したところ、表彰の取り消し決定の連絡を受け、筆者の疑義内容についての公表を求められた。そこで、ここにその疑義内容について述べることとする。即ち、当該論文について、先行研究の評価のあり方、プライオリティの問題など諸々の点を挙げるものである。

研究の方法―拙論解釈の誤謬

まず、筆者の論説が使用されているその解釈に、重要な誤謬が存在しており、それも１点に留まらないので、それを検証した結果を述べる。

（1）「はじめに」をめぐって

冒頭で、いきなり筆者のことが話題として上がっている。当該部分を全文引用してみよう。

「博物館」[マ]その用語は、中国語の文献では、1842年出版の『海国図志』第

50巻の「英吉利国総記」と題される著作のなかに使用されていることは山本哲也が指摘している（註１）[1]。このことは、山本の論文で紹介された以外に殆ど周知されておらず、当用語は1860年の遣米使節団の通詞であった名村五八郎元度による『亜行日記』に記されたのが一般的に知られているため、「博物館」なる用語は日本人によるオリジナリティな訳語であるとする説が日本では定説である。

わずか10行足らずの文章であるが、ここに既に引用の誤り、認識の誤りがあることを指摘しなければならない。拙稿「博物館学史の編成について」[2]を以下に引用してみよう。

日本人が初めて「博物館」という用語を使用するのは、上記の万延元年の遣米使節団の通詞である名村五八郎元度の記した『亜行日記』であった。「博物館」という施設の認識が芽生えるのである（註７）。『亜行日記』以前に中国の魏源の『海国図志』（1842年刊行）において「博物館」が登場し、同書が日本にも持ち込まれていた（1849年版）という事実があるものの、日本人によりその施設を確認し、記された「博物館」の意義は極めて大きいものと思われる。

まず、引用の誤りを指摘する。

筆者は、実は後藤純郎氏の研究によって『海国図志』にて「博物館」の用語が使用されている事実を知り、それを記した経緯がある。筆者の上記論文では、後藤氏の論文は文献名として挙げていないが、註７に記した文献の中で、その後藤氏の文献には触れているのである。

註７に示した文献は、全日本博物館学会の『学会ニュース』に掲載した文章である。「博物館関係文献紹介　その５《『亜行日記』の正体》」[3]と題する文章の中で、次のように記した。

今から20年も前になるが、後藤純郎氏が『教育学雑誌』第24号（1990）に執筆した「万延元年遣米使節と博物館、図書館の見聞」において、魏源の『海国図志』（1842年に刊行され、1849年の改訂版が日本に輸入されている）の中で、大英博物館を「博物館」と記されていることが明らかにされており、名村もそれを参考としていた可能性があるというのである。もちろん、それを鵜呑みにするわけにはいかないが、ここに日本において「博物館」という言葉が生まれ、普及していく過程については、さらに検討の余地があることを改めて知ることとなった。

このように確認すると、筆者は『海国図志』の文献名は挙げたものの、第50巻「英吉利国総記」とは一切記していない。筆者の指摘はあくまで『海国図志』であるのを何故かその詳細にまで踏み込んで指摘しているようにされているのである。

また、「山本の論文で紹介された以外に殆ど周知されておらず」というのも誤りと言える。もちろん、博物館学の世界では、筆者の紹介以外では周知されていないかもしれない。しかし、後藤純郎氏の業績を蔑ろにするような形で、いかにも筆者の学説であるかのような記述に、戸惑いを覚えてしまう。それは、後藤氏への申し訳なさもつきまとってしまうからである。

さらに、『海国図志』にて「博物館」の用語が『亜行日記』に先行して出現していることを紹介しているにも関わらず、「「博物館」なる用語は日本人によるオリジナリティな訳語であるとする説が日本では定説である」とするのが全く解せない点である。

日本人によるオリジナリティとは、誰が唱えた説なのだろうか。張哲氏は次のパラグラフで、「中国では、近年まで当該学説を支持する著論が数多く存在してきた」とあるが、当該学説とは何を指すのだろうか。少なくとも、「博物館」が日本人によるオリジナリティな訳語という学説が日本では定説であるとは思えないので、中国にて「当該学説」が唱えられたということなのだろうか。いや、張哲氏は、「日本では定説」と言っている。どうにも矛盾があるように思えてしまう。

このように、冒頭で既に理解に苦しむ文章となっていて、その後筆者が読み進めるに当たって、不安を抱えてしまったのは当然なのである。

なお、筆者の論文「博物館学史の編成について」で後藤氏の文献を挙げていないから、張哲氏が後藤論文を引用できなかったというのは理由に当たらないだろう。註にて後藤論文を紹介した『学会ニュース』の文章を示しているし、『学会ニュース』は、当該学会の連絡誌的性格を帯びているとは言っても、学会員以外に秘匿されているというわけでもなく、学会員以外の引用を阻止しているわけでもない。引用論文の註を紐解けば、いとも簡単に後藤論文に辿り着けるはずなのに、その労を怠っていると言うことができてしまうのである。研究というのはプライオリティに注意しながら進める必要があるのだから、註の文献を無視するのはあまりにも杜撰と言わざるを得ないのだ。それも、学部生ならまだしも、大学院博士課程後期の“研究者”なのだから。

（2）中国人より先に博物館を見聞したのか？

第一章の緒言でもまた誤謬が見られる。

椎名仙卓（名村五八郎による「博物館」の用語使用の初出）、青木豊（福澤諭吉の『西洋事情』による博物館施設の一般への理解の拡大）の研究を踏まえ、筆者が「「博物館」用語の出現を年代順に配列し、当用語が中国人によって先に使

用されているにも関わらず、博物館そ(マ)の(マ)施設を先に確認したのがロシアに漂流した日本人であり、日本人により「博物館」を記したことの意義は大きいと結論づけた。」と張哲氏は記している。

当用語が中国人によって先に使用されているにも「関わらず」、博物館のその施設を「先に」確認したのが漂流民であると、筆者が述べているように書かれている。筆者は、「関わらず」とか「先に」とか、またはそれに相当するような記述（表現）は一切しておらず、何故もってそのように解釈できるのか、不思議でならない。

さらに第一章第三節で、別の拙論が使用されている。『展示学』第48号の「「博物館」の成立前後に海外の「展示」を見てきた日本人」(4)であり、そこでは漂流民・大黒屋光太夫と津太夫の漂流と、博物館施設を訪問した事実を紹介した。それを張哲氏は「中国人より日本人が先に博物館施設の存在を確認したのは確かであると上記の山本によって検証されている。」と記しているが、これも不思議なことに、筆者が「中国人より日本人が先に博物館施設を確認した」ことになっているのである。日本人として博物館施設を早くに訪れていることは書いたが、その博物館施設というものの存在確認について、日本人が先か、中国人が先かの優先性に関して触れたことは一切ない。にも「関わらず」筆者の言であるかのように書かれているのだ。

何をどう読み込んだらそう解釈できるのか、執筆した筆者ですら理解できないのに、そうするとこれは、「博物館」を記したのが日本より中国でのことが先であるという論旨を補強するための歪曲なのではないかとすら、残念ながら思えてしまうのである。

つまり、上記のごとく誤謬があるが故に、最早張哲氏の論文を信用する術が筆者にはないことを前提に、さらに読み進めなければならない辛さがあった。学内関係者に通知しなければならなかった理由がここにある。

研究方法の問題―関連文献渉猟の姿勢など―

さらに読み進める中で、果たして当該論文のプライオリティは保証されるのかどうかという疑問を持たざるを得なかった。即ち、「博物館」の用語の初出が『四洲志』であり『海国図志』を遡る等の指摘が、張哲氏によって初めてなされたのかどうかの疑問である。事実、筆者が本件をきっかけに家永真幸氏の研究(5)の存在を知ることとなって、プライオリティが侵害されているのではないかと考えざるを得なくなったのだ。

詳しくは、家永氏の論文と比較し読まれることを推奨するが、張哲氏は家永氏の研究の存在に気付かなかっただけなのだろうと考えるしかない。その上で執筆したがための「過失」であったと考えるが、拙論の扱いからしても、本件は文献

渉猟の未熟さが招いた結果と言わざるを得ない。やはり綿密な文献調査の必要があったと言えるだろう。

また後藤純郎氏の論文にも言及すべきだった点は、拙論の読み込みの甘さからも言えることであって、そもそも先行研究の悉皆調査に不備が生じていたのだから、家永氏の論文に辿り着けなかったのも頷くほかない。いずれにしても、さらなる文献の追究が必要だったわけである。

ただし一つ解せない点があり、それは家永氏が「管見の限り、中国語圏では陳建明氏が2005年にようやく「博物館」の初出は『四洲志』であると主張し、同語は日本人が先に使い始めたとする従来の説を否定した」と記載するごとく、「博物館」の用語の初出が『四洲志』であるという説を立てたのが陳建明氏(6)であるとされるものの、張哲氏は同論文を引用、参考としながらも、陳建明氏の初出説には言及されていない点である。

ここに、家永氏のプライオリティとともに、陳建明氏のプライオリティに対しても、侵害している恐れがあると言わざるを得なくなった。いよいよ張哲氏の論文の信憑性への疑念が高まってしまったが、中国語文献の理解力が不足している筆者には、その検証が困難なところもあり、ここではそれ以上言及しないこととしておきたい。

おわりに

今回の主原因として、肝心の文献渉猟の甘さがあって、論文全体の信憑性に関わる過失を生んでしまったのだろう。しかし、張哲氏の論文は、その内容には“面白さ”（興味深い事実）が含まれているのも確かである。筆者は中国語に疎く、中国語圏の文献を読解、検討する能力に欠けるのは否めない事実であり、その意味では、中国語文献を駆使した張哲氏の論文のその内容は刺激的であった。

張哲氏には、当該論文について研究のプライオリティや解釈に配慮しつつ修正を加えられ、新たに発信された上で、今後の博物館学研究に大いに刺激が与えられることを期待している。それが筆者の切なる要望である。

註

（1）当該論文や引用文献（拙稿）の註番号は本来半角括弧書き文字で、本誌の註番号の記述と一致するため、混乱してしまうと思われる。したがって当該文献または引用文献の註番号は（註○）と変換し、本稿の註と区別することとする。

（2）山本哲也　2011「博物館学史の編成について」『博物館学雑誌』第37巻第１号、51～84頁、全日本博物館学会

（3）山本哲也　2010「博物館関係文献紹介　その５《『亜行日記』の正体》」『学会ニュース』No.94、11～13頁、全日本博物館学会

（4）山本哲也　2010「「博物館」の成立前後に海外の「展示」を見てきた日本人―日本における

博物館展示の始原との関わりを考える―」『展示学』第48号、28～35頁、日本展示学会
（5）家永真幸　2013「中国の「博物館」受容に関する初歩的検討」『東京医科歯科大学教養部研究紀要』第43号、27～42頁、東京医科歯科大学
その後、筆者未確認ながら、下記文献に同内容の記述が掲載されているという情報を得ている。
家永真幸　2017『国宝の政治史「中国」の故宮とパンダ』346頁、東京大学出版会
（6）陳建明　2005「漢語“博物館”一詞的産生与流伝」『回顧与展望：2005年中国博物館発展百年―中国博物館学会学術研討会文集』212-216頁、紫禁城出版社